

昭和二十六年七月二十五日發行 第三種郵便物認可
(毎月一回・十五日發行)

(通第一四七号)

慈光

第十三卷 第六号

目

両聖に親炙して……………	花田正夫……………(1)
教行信証「信巻」(二)……………	近角常観……………(3)
心と真実……………	佐藤強三郎……………(9)
ただ念仏して……………	松村繁雄……………(12)
善財童子の求道……………	福島政雄……………(15)

次

兩聖に親炙して

花田正夫

『歎異抄』によつて、私の救いの道は、ただ念仏のひとつと知らされた日から、三十余年の間、法然・親鸞の兩聖人を追慕し、渴仰して参りました。

時に選択集、教行信証、御和讃、御法信、等々の御書をひもどき、折にふれては叡山、黒谷、六角堂、磯長に、御流適の地に御遺跡をたどり、或は御真影に祖聖の慈懷をしのび、または御真筆の中に祖聖の息吹を仰いでまいりました。かれこれして居りますうちに、今度の御遠忌をお迎え申したのでありますが、先日、昔覚えた一片の詩を思い浮べ、それを繰り返して誦して居ります。それは、

春日、春を尋ねて、春を見ず
芒鞋踏み遍し、隴頭の雲。

帰り来つて、笑つて梅花を捻つて嗅げば

春は枝頭に在りて、已に十分

という、誰にもよく知られた漢詩であります。春が来たというので、一日中、野に山に丘に春を尋ね歩いたけれど何処にも見出すことが出来なかつた。疲れきつた脚をひきずつて我家に帰つて、茶でも喫しながら、ふと庭前を見る

と梅が微笑んでいる。その梅花を嗅ぐと、その枝頭に春はすでにみち満ちていた。……とでもいう風情であります。これはそのまゝ儒教の「放心を収める」こと、平素自分を忘れて生活している者に、自分自身を見出してそれととのえることの大切さを誨えられます。徒らに眼を外に向けて道を求めたのでは、結局無駄骨折りに終ることを知らされます。

さて、法然・親鸞の兩聖に親炙申す唯一の道も、このことが最も大切であると、今更のように省みさせられるのであります。

兩聖影現の場と時

外に向けられた眼にうつる聖人は、行きずりの人、よそびとでしかありません。たとい御流適の地にたたずんで、無量の感慨に沈んでも、それだけでは、所詮は、あれも一時、これも一時の素見の旅に終ります。

兩聖の影現される場所は、私共の、この三毒の煩惱のたぎる胸の中でありませう。お遣い申す時は、常にいまであり

ます。ただいまのこのころを外にしては、生ける聖人の直面目にお遣い申す時も場所ありません。

そこで何よりも、現在の自分ということが大事となるのであります。ところが、最も古くして常に新しい問題は自分自身を知るといふことのむづかしさであります。

親鸞聖人は、教行信証の化身土巻に、

「しかれば穢悪独世の群生、末代の旨際をしらず、僧尼の威儀をそしる。いまよときの道俗、おのれが分を思量せよ」

「独世の道俗、よくみずからおのれが能を思量せよ。しるべし」

と、真実の教にあいながらも、なほ不徹底に終る原因は自己の分際、能力を知らぬところにあると、きびしく誡めていられます。

法然聖人の観經の解釈に、十悪、愚痴の悪凡夫の救われ

て往生する經文のところを、

「この下品もつとも要なり。頗る我等が分に相当せり」と、そこに仏智の鏡に照されて、「我等が分際」を見出し

ていられます。

源信僧都は、往生要集六に

「下品の三生、あに我等が分に非ずや」

と述べられ、しかも僧都七十六才の時に、病床に侍る者に、観經の下品往生の御文を誦誦せしめられ、その声を耳にされながら、念仏の息絶えられたのであります。

中国の善導大師は、往生礼讃に

「仰ぎ願わくば一切の往生人等、善くみずからおのれが能を思量せよ」

と、人に勧められると共に、御自らは、

「自身は是れ具足煩惱の凡夫、善根薄少にして、三界に流転して、火宅を出でずと信知し、……」と深信していられます。

又道禪禪師は安樂集上巻に

「一切衆生、すべて自ら量らず」

と誨えられて、大乘仏教を志す上品の者、小乗仏教や世間善に精進する中品の者、そうした善人の道は

「道俗を問うことなく、未だその分にあらず……」と述べられ

「一生造悪の凡夫は、ただ弥陀の弘誓一つ」

と自ら帰し他に勧めていられます。

観經は、我等の根機の真実の姿を照らして下さる經典であります。特に末法の時に生誕せられた以上の高僧方は異口同音に「十悪、愚痴、五逆の下品の機こそ我等が分際

なり」と御身にひきあてて告白しておられます。
私共も亦、このよき人々の仰せをうけて、我等が能力、我等が分際を知らされますとき、親鸞・法然の両聖人が、

教行信証信巻(二)

近角常觀

この三毒の煩惱の渦巻く中に、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀
仏と名告られつつ、その真姿を影現して下さるのでありま
す。

今日は続きを御話いたします。昨日は初日ゆえ、大体を
お話しておきましたが、昨日

『夫れ信樂を獲得することは、

如来選択の願心より発起す』

の文はあらかた申し述べた。さりながら、なお一応くり
返し昨日言い尽せぬ処を話しませう。昨日充分に云いま
したが今すこし選択願心のことを際立てて言いたい。

選択願心とは、法然聖人が選択集に示された肝心のこと
にて、今日他力信仰を聞くものが口なれて居るが、実に法
然聖人が、選択本願という一大德音を宣説したまいし為に
一面当時の仏法は根本的に破壊されたと云うてよい。従つ
て法然聖人の示された他力の真意は、この選択本願により
明らかになるのであります。故に聖人が一代の間、一世に

向い示されたる最も肝要のことは、この選択本願にあるの
です。この扇はかなめで総て保たれて居ります。他力本願
の要は選択本願力であります。されば法然聖人を流罪に処
するとも選択の二字は捨てられぬ。たとい、源空を死罪に
処するとも云々とあるも、この外はないことをよく味わ
ねばならぬ。

意味は昨日云いましたが、選択集を読まれた方は解り易
いかも知れませんが、他力専門の言葉で云うと口馴れてお
る故、今日の言葉で言えば、我等凡夫が、仏の悟の境に往
く肝心の問題、即ち相対有限の我々が絶対無限の仏の境に
其間に如何なる連絡をもち、絶対の境に往かれるかと云う
ことが、宗教の根本問題であります。

処でその關係を明かに云うと、絶対と相対と融和の境に
行くと区別なきも、既に相対に我々がありて、絶対に行か
んとするについては、如何にしても其間、相対のものが、
己を正しくして絶対に行く一つの方法よりありません。

しかし行かんとする処は崖の上で、崖の下より登つて行
かねばなりません。処がその道が立派に往けると解決する
のである。云い変えると積尊の説かれた道で、六度万行と
か、種々の自力の道は皆縦に仏の教を歩む道である。これ
が出来るか、實際上如何。若し戒を持ち座禅をして達する
ことが出来ぬとなると、吾人はこの關係の問題に於いて道
はあれども往くことが出来ぬこととなる。そこで今一つの
問題は、それならその道ありと雖も実行出来ぬこととなる
親鸞聖人は、

一切の群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時に至る
まで、穢悪汚染にして真実の心なく、虚仮諂偽にして真
実の心なし。

と云われました。苟も人間、群生海、無始よりこのかた
今日今時、一步も真実心がありません。大なる石、小なる
石、砂であろうが、砂利であろうが、石といえ下へ落ち
るものであります。これ聖人が初めて云うのではない、選
択願心より聖人の心にうつる結果からでることでありま
す。こゝでいう積りではありませんでした、丁度具合がよい

から私の経験を申します。この人生問題、信仰問題、教理
問題、コテ／＼している間は信仰にゆかれませぬ。

私も、もとより敢て如説に修行することを企てはしまし
てましたが、幼より宗教の教育をうけたる結果、是非とも
善き心、理想的にしたいと色々考えて、なお恥を云えば、
立派に宗教のために尽す、公のため、正義のためには、生
命をなげうつてもよいと思ひ、その通りに実行して居るが
如く思うて居りました。

こんな考えのある間は、選択本願や、他力本願など意味は
解らぬ。何もこの様なことを云い出す必要はなけれども、
自力他力の二道、何れをとろうかとよく人の言う所である
が、根本の間違ひである。自力で遣れる位なら自力で遣
る自力が出来んから他力でやるのである。

ものは二者同時にやることは出来ない。処が今云う如く
私は遂に自力で出来ずして衝き当つて了いました。

最後に自分ばかり全力をそそいで真面目に遣つて居るも
人は了解せぬ。世の中の人は真面目で遣らぬ。人は勝手な
ものだ。世は強い者勝ちである、と人を悪しざまに思ひ始
めたのが抑々衝き当りの始めて、人を隔て、形の上では同
情し、譲りもして居るが、心の上ではそうなつて居ない。
悪い心がやまない。名譽心を棄て、やるなどと思つたの

は皆虚言であつた。人を憎む心が起りなぞするは全く名譽心でやつていたからだ。

これが信仰問題に衝き当りの始めで、もうかくなれば、如何によくしようとするも駄目であります。かよふのことは既に御経験になつた方に申しますのでありますから、後戻りの様ではあります。こゝういふことは切り詰めて何処か殺すか、何れかにせんければいかぬ。切り詰めた問題に懸りながら、他方であると云つてポートとふくれて了うてはいかぬ。苦しむどん底まで真面目に飽くまで考えねばならぬ。如何しても隔て心がやまない、こちらが隔て心を止めさせずればよいのだと思えども止まない。ここでどうするかとカツキリ問題が逼つて来る。

一方からはやらねばならぬ、一方からは出来ぬ、往くも還るも仕方がない、こゝである。こゝういふ道は進むことがどうしても出来ぬ。

が、一つの道が開かれてある。然しこれは下から此方が眺めては駄目で、上から眺めて我等を見とめて下さる方がなければならぬのである。私の上より云えば、昔の信者によくある、中位で、そういうものを助けるが仏、とイ、カゲンで胡麻化して仕舞うからいかぬ。今でも、そういうものを助ける仏だと中位で安心してしまふ人が沢山ある。

ても所詮なしと思うた。

処に、最後に至りて『懺悔録』にある如く、始めて、それは仏であつた、と氣づかせて貰つたのである。一点であるが、向より来る友と云ひ、同情の深い友と思うたは実に仏の慈悲のことであつたと、始めて氣のついた時は、今まで斯くとも知らず、反対の方のみを眺めて居つた。誠に済まなかつたと懺悔する。

君、善い、位の事では安心せぬ。人がお前は善いと云うは、今迄人を胡麻化した結果で、人がよいということも、それで安心は出来ぬ。

又人が、悪くてもよい、と云うとも、私は悪くても困る仏が悪くてもよいと仰せられても、悪くても私が困ると云いたい。

それなら汝は悪い、といわれたら、人がいよく自分を見捨てたと苦しむ。

それなら如何いのがいよか。「己の悪をスツカリ知り抜いた上に、その己の悪を捨てず、如何に悪く、浅聞しきをも見捨てず、それが哀れであると、同情してくれる。」その人のまことによりに始めて安んずる。

仏の大慈悲の涙のとは、私の悪がもたなのである。悪くてもよいではない。そのような者は他に助かる術なき故

出来ぬは、出来ぬと、自力を投げ捨てるのである。

隔て心のやまぬ苦しき我心を見て、誰か、如何にもそうであろう、我は了解して居る、汝の境遇に、あればいかにも上へは登れまい、それも尤もだ、苦しむ心を打ちあげよ否打ち明けずとも皆承知して居る、否それを引受けてやる、心配するな、我は、汝の如く善き心起らず疑のとれぬその心をよく理解せる故、成程汝は悪いけれども、その汝の心をよく理解せる故、成程汝は悪いけれども、其の悪い、浅聞しき心を了解し、汝の隔ての止まぬを悪しく思わずもつともと思う。成程、汝の境遇なればその心も起る、その苦ししい心に同情して、其苦を悉く引受け、汝の相談相手になるから心配するなと、向うより私の苦の起る点をよく理解して、私が隔て、憎めば、それだけ弥々同情して、大慈悲心を以て、その悪いのが可哀想と同情してくれる人があるならば、タツタ一人、一滴の涙を注いで下されば、私は復活するのである。

それさえあれば、世こそりて敵なるも、同情ある友の一滴の涙に、如何な我慢の私も蘇ることが出来る、その友にあらば、死すとも、もつて瞑することが出来る。否その慈悲の恵の光にあらば、我はそのために死するともよい生命を捧ぐるも構わぬ。人生この慈悲の塊なくば人間生き

それに光を与えてやりたい、その無明より救つてやりたいの慈悲の心を以て眺める友人の親様である。

かねて聞く親は此広大の御心も眺めて下され、此様な悪人を果れたまわず哀れんで下された、実に有難い御慈悲と氣づいて見れば、あゝ自分は浅聞しきものであつた。今までこれをどうかしなければならぬと思つて居るうちは解決出来なんだ。今日まで浮かぼうぼう、隔て心を取らうなどと思つて居たのは、抑々間違であつた。実に有難いと根本的に心が解けて仕舞う。隔てるけれど御慈悲があるから、ありがたいではない、その隔て心が溶けてしまつたのであります。

されば仮定ではありません。苦しい時、思い出すという様なものではない。仏かねて我等の破戒無戒を思し召しての選択であります。あらゆる相対界の道は駄目だと、仏かねて、昔にしろしめして、それ故総ての自力の道を捨て、ただ本願、南無阿弥陀仏ひとつで、助けんとしたまうたのである。その意味は、相対より絶対に向う道では駄目なものが、助けられる道はないかと、五劫が間思惟して選択なされ、愚痴無智の者の称え易き様、南無阿弥陀仏の一つにて助けるのと、そも／＼の本願を知らなければならぬ。

我仏と成らんに、十方衆生、我が名を称えんに

下十声に至るまで、若し生れずば正覚を取らじ。
と云い給いて、戒をせよとは仰せられぬ。かゝる人を助けようとして、念仏の道をたて給うたのである。

法然聖人の『観経散善義』を読まれた時
一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥、時節の久近を問はず、念々に捨てざる者、是を正定の業と名づく。彼の仏願に順するが故に。

とあつた。一心に専ら、とは他のものは何もいらぬ。他のものをならべぬ様に一心である。専ら南無阿弥陀仏を称念するが、彼の仏願に順する、のである。彼の仏願とは、称我名号とあるばかり、この外ない。この念仏ばかりで助けんと言うのが如来の本願である。

我々は衝きあたつて苦しんで居るけれども、そんなことに今更の問題ではない。仏かねてしろしめして、十方衆生とよびかけたまいし時、既に戒律等を棄てて、南無阿弥陀仏一つで助けようとのたまう、その如来の御心が本願である。願心である。其心の儘が南無阿弥陀仏一つとなつたのである。下の方へ向けて綱を下して下さつたの故、直ちに其綱を握ればよいのである。その如く、唯仏の御心を有難う御座いますと頂いたのが信心であります。

法然聖人はこれ思いきり書かれました。処が梅の尾つがの尾おぬのである。

如来の仰せを聞き、広大な御慈悲とは思ひながら、自分はずほど悪くないと思つて居る。これでも助かるのだと思つて居るから、選択の眞の意味がわからぬのである。

親鸞聖人は薬の効能を眞に味わゝれた。他の薬では助からぬものを、助けようといふこの薬を与えられたは、全くこの親鸞一人がためだと味わゝれました。親鸞がその悪いものである。他の薬で助かる位なら、これを与えられぬ。

他の薬で助からぬといふことを親鸞聖人はちやんと御承知になつてあつたのである。即ち危篤の病人であつても、まだ養生すればよくなると思ふもの故、南無阿弥陀仏の薬を飲まないでも、助かると思つて居る。助からぬ、他の薬ではとても助からぬと思つたればこそ、こしらえた南無阿弥陀仏ではないか。『選択集』は自分は一分もよいことの出來ぬものと、充分宣告された親鸞聖人によつて、始めて眞の意味が現れたのであります。中位ちゆうゐのことはいけません。悪い者だけでも助かるぐらいではありません。到底助からぬ者なればこそ建てられた本願ではないか。

薬の効能書は三百八十人が読まれました。誰にもわかることを、それらの人がわからぬは此処なるを氣附かねばならぬ。我危篤、到底たすからぬ奴、この愚痴、無智なる親

明恵上人はじめ、叡山の偉い僧侶方が、法然聖人に反対して、そんなこというものは仏法でない。自力でなければならぬと大いに攻撃をなされました。明恵上人などは身を刻みても戒をたもち、仏道を励むの人である。法然聖人より云えば、いくら左様に励んでも、出来ぬことをするのである。それ故駄目であるといわれる。しかしまた明恵上人からいえば、例ひ出来ぬとも左様するのが、仏の遺戒であるもし斯くせずば仏教でない。そも／＼発菩提心は仏教の根本、これを捨てた法然聖人親鸞聖人は悪いと云われる。これは実に、自力、他力の水際である。明恵上人は法然聖人の云う事は仏教の破壊する源であると云われた。

法然聖人は、到底戒律の保てぬもの故、本願があるのでないか。例え源空を死罪に処せらるるとも念仏はやめられぬ。登れぬものを上より繩を下し、上げてやろうというのが仏心である。其心のありだけが南無阿弥陀仏となりて現われ給うたのである。法然聖人の御弟子三百八十余人もあつたが、皆眞実わかつた人は少なかつた。『選択集』を読みながら、皆わからぬのはこれ故である。それは効能書は見て、文面はわかっている。立派な薬だということも解つて居るが、自分はまだ、戒律を保てぬほど悪くないと思つて居る。薬はよけれど我等はそれほど悪くない。悪人を救う程のもの故、我も飲もうというような具合だから、解ら

鸞が、この念仏一つで助かると示された本願の綱こそは親鸞の生命である。そんなのかと中位の事にしてはいかぬ。悪いけれどもお慈悲がありがたいではゆかぬ。故親鸞聖人は『歎異鈔』にて

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり。……そのゆえは、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちて候わばこそ、すかさされたまつりてという後悔もそうらわめ、いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

これが親鸞聖人の身の上だと仰せられたのである。一つもよいことの出来ぬ我身の上、そのものに飲めと下さる。その時は薬を詮索する余裕があるか何うか。効能があるかないかは此方で調べてわかるはずはない。この如くどの薬もきかぬ者に飲ませて下さるためのお薬といただくなり、ああ有難いと頂くばかりで、だまされぬか何とか思つては、他にたすかる道のある場合のことである。

源空聖人は四十三歳まで、他の薬を飲んだが到底駄目だとわかり、遂に善導の、一心専念弥陀名号の御文によりて始めて安心なされた。何れの行も及び難きものを助けようとの慈悲である。ここがどうも頂けぬのであります。

弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、他人のことではないのであります。

心と眞実

佐藤 強三郎

第三編 第四 遺言状

区長はそれから、自然と仏様へ御参りするようになった。そして思った。

……自分は罪人である。こんなひどい者を、どこまでも見捨てぬ、呆れぬ、とは、ありがたい事である。人は何とほめても、自分には実はその資格はないのだ。こんなものが区長たなんて、恥かしいばかりだ。家の子供も知らぬ、まして世間はなお知らぬ。……若し知れば、一べんにみんなが呆れてしまふだろう。ホンに生きながらの地獄である。このような自分も、限らない慈悲につつまれて、自分のはからいをして、頭を下げて生きて行こう。

罪消したすけたまわんとも、罪消さずして助けたまわんとも、自分には何も言う資格がないのである。地獄へ行くのか、極楽へ行くのか、自分で選ぶ資格のないものである。

かゝる極悪人を捨てられない慈悲の願船に乗じて、御眞実に任せて行くばかりである。

……坐つて居ても、立つて居ても、寝ていても、歩いて居ても、自分は自分である。寸毫の増減もない」

区長は、金よりも尊い宝を知つたのだ。どうしたら、分家へ申訳が出来るかと、日、夜、考えた。

……そしていつ死ぬか分らぬから、又信哉さんも旅に出たので、今のうちに遺言して置こうと書いた。

記

- 一、 自分の財産の三分の毫を先ず分家へ贈与する事。
- 二、 自分の娘は互に承知ならば分家の伴へ嫁にやり度い事。
- 三、 不審の事は信哉さんに聞いて定める事。

年 月 日 名 以 上
(註 娘は三十才、相手は二十二才。)

区長は職務のため公会堂等でよく議長をやつて、大勢の前に立つた。そして何時も心に「自分は罪人で、申訳ない者である。只この余生を使つて、すこしでも村のために尽くさせて貰おう」と念じた。

それは何時の間にか、その対度に現われた。人は彼を、私心がない、私欲がないと評するようになった。区長は、心では、いつも、誰に向つても頭が上がらなかつた。

極悪の自分を、どこまでも呆れ給わぬ御慈悲を仰いで、一切の善悪の噂を超越して、只生命の限り、眞面目に働こうと念ずるのであつた。

区長は人に弁解しようともせず、打明けようともせず、只黙々として念仏した。

区長の家へ季節はずれだが月見にと、善兵衛と捨吉が招かれて来た。みんなが色々語り合つた。

区長「他から可哀想だなんて恵みを受けるのは意気地がないといやに思つた事があつたが、自分で今更どう仕様もない罪人とわかれば、実にありがたい事である」

捨吉「他力なんて、意気地がない、自分でやらんで、他人にまかせるなんて、人間として最も下等である、と云うが、自力かなわで、自暴自棄になつたり、自殺したり、人を恨んだりする者がいくらもある。

自力で駄目だと坐りこんで動けなくなつた者が、他力に起こされてどんどん歩ける様になる。こんな不思議な教がある」

と話しかけても、善兵衛は黙つている。

区長は時々捨吉を訪ねた。捨吉は例の如く、里芋をふかしたりしてもてなした。区長の方ではよく生菓子の高価なのを持つて来た。或時、

区長「御宅の奥さんは仏様へ参るか」

ときいた。区長の気持では、さぞ捨吉の妻君は立派な信者なのだろう、と思つていた。それにしては変な処もあると気にかゝつて、改めて今日は口に出したのだ。そうすると意外にも

捨吉「とんと、分りません者で、仏様など形だけ拜んでいるだけです」

区長「そうですか。お前さんの奥さんがですか」

といかにも不審らしく、頭をかしげて考えた。

区長「いつも一緒にいるのだから教えたらいいでしよう」と云えば

捨吉「何事も因縁ですね。私の様なもの力では、どうすることも出来ぬことです。仏様の不思議を不思議とせずあたり前と、取つていきますからね。妻は驚きませんよ。然し、私は少しも心配しません。現に私も長い間この通りでした。極悪の自分が、無碍の光にてらされて、ついに光に会つたのです。心に届いたのです。無碍の光ですから、必ずや妻も救われる事を信じています。今は淋しいです、然し、決して悲観はしません。無限の望みがあります。」

ある時、捨吉は善兵衛の処を訪ねた。一人で本を読んでいたが、顔を上げて、善兵衛は、

「良い所へ来てくれた。自分は近頃どうも、あまり喜ばれぬようになつた。色々話もあるが、さつぱりうれしいことがない」

捨吉「そうか。そんなこともある。あまり元気がよくなつ

つた。また信哉さんは「先祖から申し伝えて来た仏様のお経は読めばありがたい事にぶつつかることがありますよ」とも云つた。

何とかして早く信哉さんに会いたいと思つて待つが、仲々来ない。こんなに待遠しく思つたことがない。

半年位たつたある日、ひよつこりと信哉は来た。その晩は大勢来て、夜遅くまで話はずんだので、区長は話をすることが出来なかつた。その翌晩遅く信哉の室へ行き、例の遺言を見た。

信哉はジート見ていたが、だまつて返した。お茶を呑んだり、菓子を食べたりして考え続けていた。そして

「しばらく泊めていただきますから、お互にゆつくり、

て、仏様がいらなくなつたと自惚れるとそうなるよ。気をつけないと損だ。私も時々やつたことだ。そんな時は自分では、どうしても気がつかんよ。信哉さんに聞いたらいでよう」

捨吉が帰つてから、善兵衛は早速信哉へ手紙を書いた。数日すると返事が来た。

煩惱にまなこざえられて

撰取の光明みざれども

大悲ものうきことなくて

つねにわが身をてらすなり

御同様、ありがたく拜見致しますよう

眼を他の方、仏の方へ向けましよう。

と書いてあつた。

拜写

区長は信哉さんと別れてから、あの話を気にした。いつ死ぬか分からぬからと、遺言に書きはしたが、生きている内に、何とか解決する良い方法はないものだろうか、と一人になると、夜も昼も、暇さえあれば心からはなれない。あの話を、知つているものは、自分と信哉だけだ。

信哉さんは、「罪消して助けたまわんとも、罪消さずして助けたまわんとも、自分には注文する資格がない」と云

考えて見ましよう」

区長「そうですか、私は長く長く考えたのです。」

翌日は農家も忙しいので誰も来なかつた。区長は他の用事をすてて、信哉の所からはなれない、折を見ては問答をした。

信哉「貴方の件せがれさんにこの話を出せばどうなるでしょう」

区長「良い子ですから大丈夫だろうと思ひますが、三分の一ですからね、ひと通りではおさまらぬと感じます」

信哉「そうですらうね」

朝から夜まで、一日中二人は色々の話をしていたが、この程度の内容で過ぎてしまつた。

続く

ただ念仏して

松村繁雄

「松かげの暗きは月の光かな」

松の影が地上に黒々と写るのは月の光が訝やかに照るからであります。私のドス黒い姿が私に見えるのは、仏のま

ことの光が照らして下さるからであります。光に遇わねば仏の力でなけねば、私はわが影を知る由もない無明の奴であります。

さて、光に遇うてわが黒い影が見えると、どうなるか？
「黒いのは持ち前だから黒くても構わぬ」という事にして済まされるものではありません。若しそれがそのまままで済まされるとしたら、それは、影は影でも、おぼろ気に見ている影であつて、本当の影が見えていないのであります。わが影が本当に見えたら「このまま」などと捨てて置けるものではありません。あまりの黒さに、恐ろしさに、何とかしてその黒いものを始末したいとあせらずにはいられません。そこに「どうしたらよいか」という捨てておけない心配を生ずるのであります。

その「どうしたらよいか」という問題は論理ではありません。考えて、思索をこらして解決できるようなまやましいことではありません。

「おの／＼十餘ヶ国の境を越えて身命をかえりみずして尋ねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極楽の道を問いきかんがためなり。」
ひとえに往生極楽の道を求めずにはいられない、それは生命がけの問題であります。そのいのちがけの問いに対して「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」と、お示し下さるのであります。

はつきりと見せて下さるのがわが黒い影であります。一時も半時も黒い影を忘れてはられません。

「ただ念仏して」ということは「黒い影を忘れてよろこべ」と仰言るのではなく「さぞ黒い影に困るであろう」との御親切であります。その御親切の光によつて、いよく私の黒い影の正体が見えて来ます。どのように黒いのか？私はここに見せて貰うままに少々その有様を語つて見たいそれは悲観ではありません「ただ念仏して」助けられまいらす身の歡喜であります。黒い盲の私に、遂に届いて下さる本願力の不思議であります。

夕陽が沈む、空が茜色あかねいろにひかると見るうちに黄昏たそがれが地上を包む、「今日」はこうして永遠に消える。けれども私はそれをそれほどに惜しいとは思わないで「又明日がある」と思つて平気で見送つて居ります。……光陰は悠久だが、歩く私の足には限りがあります。今日を送つたということ、燃えるローソクがじり／＼と細つて、そこに残るものは愚痴のうつつの灰だけであります。

それなのに、「明日は／＼」と夢を追うて歩きます。「明日」は永遠に続くでありましょうか、私の明日は限られて居ります。私の「明日」に敵然として待ち構えているものは「墓場」であります。欲も、恋も、理屈も、すべて

「黒いままでもしかたがないぞ、ただ念仏すればよいぞ」と仰言るのではなく

「その黒い者を見捨てぬぞ」

とのお慈悲に助けられ、「そうでありましたか」と、ただ念仏させて貰うばかり、との、これまた生命がけのお答えであります。

その「そうでありましたか」という事は、次の三つのいのちがけの事柄が含まれているのであります。その第一は黒い黒い、どうしようもない黒い奴、それが私であるということ。第二は、その黒い奴を見捨てられぬとて、五劫に思惟し給う御本願であるということ。第三には、その本願を私に届けるために名号となり給うて、つねに私に離れて下さらぬということ。それが「ただ念仏して弥陀にたすけられるばかり」と仰言る、よきひとのいのちがけの仰せであります。

そこに「黒いままでも構わぬ」のでもなく、「黒い影をあらためねばならぬ」のでもなく、底の知れない黒い私である故に、それを助けたいために、お念仏となり給うて、いつもつきまとうて離れ給わぬお慈悲と分らせて貰つて、ただ念仏して助けられまいらすばかりの仕合せ者にさせて頂くのであります。

さて、その、マコトの光に照らされて見れば、いよくの夢が分解して灰になる墓場、それは「明日」かも知れませんがそれは知らずに明日は／＼と急いで居ります。

又私は夢を掴まえて生きて居ります。食いたい着たい威張りしたい、榮がしたい、得がしたい、欲しい、惜しい、そのために、争い競い、憎み嫌い、誇り誹つて目もお足らぬという有様であります。

取つたとて、勝つたとて、明日はこの肉体と共に消える夢であるのに、その夢に眼がくらんで、夢と気がきません「希望」の、「向上」のと大事に理想として居ることも畢竟その夢でしかありませんが、夢と思えません。「生きる」とは「夢を掴まえている」事であり「私」とは「夢を見ている」という事であります。

こうして、一日一日を夢の中に消して、何が残るでありましょうか。……今、そのような無明、このような罪業の私と知らされて見れば、「このままでよい」でもなく、「このままではいかぬ」でもなく、こうして見ようのない私を安養の浄土に生れさせんために、名号となつて、私につきまとうて下さる、ただ念仏してたすけられまいらすばかりであります。

六つの花咲く身にされし今日までの御恩を道の小石にも思う

お六字に迎え摂られて行く道は花も咲く鳥も啼く啼く

呼ぶ親の心は知らず幼な児は暮れる夕を帰ろうとせす
いざさらば励まんかなやその日まで念仏しながら人の

善財童子の求道

大光王と煩惱の薪・智慧の火

この南の方に都がある、この都の名を妙なる光と書いてここに王様があつて大なる光と書いてある「大光王」という。ここに行つて道を聞けという事を言われますのであります。それで善財童子はその甘露火王に教えられるまゝに又南の方に向つてまいりますのであります。この甘露火王が最後に述べましたところの事、深刻なまぼろしと見せて教化するという異常ともいへべき智慧の法門、幻の智慧、それから幻の如くに解脱する、まぼろしという事を深く考えながら、今の妙光城にまいりますのであります。その歩いて行く姿というものが歡喜踊躍、よろこんでおどり

派な物を見てもどういふ立派なお座敷を見ましても、そういう物に少しも愛着の心が無い、そういう物の姿形に引かれて執着するという心が無くて、ただ深い心に渴かように慕い求めて行く、本当の道を慕い求めて行く、徹底的の道、究竟の法と言つてございますが、それを考えながら善智識にお目にかかりたいという心一筋にまいりまして、この大光王に会いますのであります。

そうするとこの大光王の身のまわりの莊嚴、それも至れり尽くせりという有様にお経に書いてありますところの大光王の身辺の莊嚴というものが、何の為かと申しますと、衆生の煩惱を息めさせ、真実を解らしめる為である。だから大光王の身のまわりの立派な有様を見ると、自然に煩惱がおさまる、そして真実がわかるようになる。莊嚴というものもそういう莊嚴の仕方であるというのであります。私共に一寸よくわかりませぬけれど、つまり色々浮世の心引かれるような飾り方じゃない、心を静めるような飾り方である、こういう事であると思うのであります。そうすると善財童子は何時ものように大光王に菩薩の道を聞きますのであります。それに対して大光王の答えは、清らかに菩薩の大慈悲を修行する、そして解脱する、そういうところを自分は味わつている、こういう事を答えまして、諸々の衆生を利益し、沢山の衆生の心の中を利益する、それから智

つとめを

いまに死ぬ身であるものを愚きよただよしあしにころとられて

福 島 政 雄

上るような風であります。そして清らかな世界を志し願うという有様であります。足利浄円先生のお画きになりました善財童子の像はもとは奈良県の文珠院というお寺に大きなこういう姿の像がありました。それは走つている姿、たそりあります。彫刻の方の専門の方がおつしやつたのであります。うしろの方の着物の裾のはね工合で走つている姿であるという事がわかると言つて下さつたのであります。そのように走る様にして喜んで行くのであります。

さていよいよ妙光城に行つてみますと、お経の上ではこの妙光城の非常に厳かに飾り立ててある有様を、言葉を尽くして長く述べてあります。ところが善財童子はどんな立

慧の火を以て煩惱の薪を焼き、と仰うのでありますから、煩惱を薪に譬え、仏陀の智慧を火に譬えて、煩惱の薪を智慧の火を以て焚くと言ふ事をする。

これはなかなか味わいの深いところと仰うのであります。煩惱の薪だから捨ててしまふというのではなくて、それに火を付けるとその薪が火になつて、暖める、照らすと言ふような事になる。このところを読みますと、私なんか近角常観先生がよく炭団のお譬えをなさつた事をよく思い出すのであります。我々は炭団のような真黒のものである、ところが信仰の世界というものは、その炭団を捨ててしまふというのでなくて、その真黒の炭団に火を付けられて、その炭団が真赤になるところが我々の信仰の行き方である。我々自身もかえりみると言ふと、真黒い炭団であるけれど、仏の智慧で火になされる、こういうことをよく繰り返してお説きになりました。だから智慧の火を以て煩惱の薪を焼くと言ふところに深い意味があると感じますのであります。煩惱をそのままいいと言ふのじやない、併し煩惱を捨ててしまふと言ふのではない、こういう煩惱ばかりであるのを何処までも見捨てないという仏のまことが我々の煩惱の薪を燃やして、そこに火を現わされる。煩惱の薪が火になる、そういう風にする信仰の力を堅固ならしめる、大光王はこう述べます。

それから若し貧乏人が自分の処にやつて来れば、先ず必要な食物をその人に与え、その必要を満してやつてそれからあなたが何故そんなに貧乏であるかという事をよく考えなさい、この貧乏になるといふのはあなたが過去に於いて十の不善行を行つてゐる、殺生・偷盜・邪淫・妄語といふような十のよくない事をやつてゐる、あなた自身は忘れてゐるかも知れないけれども、過去前世又前世に於いてそういう不善行をやつたが為に、今日この世に於いて貧乏である、という事をよく自覚しなければいけませんという事を申し述べてそういう貧乏人を反省させるといふのであります。こういう事を言われますと、やつぱり私自身に当るのであります。過去の十不善業の為に、今日貧乏であるという事はなかなか考えませんが、自分は貧乏だなどという事ばかり愚痴のように言つております。けれどこの十不善業の爲にとやうとを言はれると、あゝ自分は何とも言われなところの業を荷負つてゐるものだなという事に目を覚まさせられます。

大光王の三昧

そういう事を今の太光王は言ひまして、それから三昧に

王を頂礼する。で三千大千世界の極悪の衆生がそこに来て太光王に御礼をする。こういう事なのでありますから、太光王の三昧の世界に於いては一切のものがお互に敬う、そしてそこに皆頭を下げるという心持になる。それは太光王自身の心持がそこに反映してそういう有様があらわれて来る。こういう風に思われますのであります。

その時太光王は三昧から立つて、遍く諸々の衆生を包み入れるという心持を述べますのであります。そして甘露の法雨と申しまして、丁度甘露のように感じますところの女法の雨、まことの道を雨にたとへまして、その雨を降らすという事を太光王が善財童子に向つて申します。そこで結ばれておりますのでありますから、太光王の世界といふものは、王が一切のものに感謝して頭を下げるという事から一切のものが王の前に跪くといふ、こういう世界を善財童子に目のあたりに示したということになりますかと思ひます。

そこで太光王はあらためて善財童子に、善男子よ、この南の方に一つの王様の治められる都があつて、その都の名を安住といふ。そこに優婆夷がいるとありますから在家の女性であります。その名を「不動」といふ、その処に行つて菩薩の道をたずねたがよいでしようという事を教えるのであります。

入るのであります。太光王が心をしつと静める、三昧にはいりますと、その城の内も外も六種震動、いろいろな姿に於いて色々な音を出して六種に震動する、それからその土地も宝の御堂も樓閣なんかも、悉く王の方に向いて身を曲げて太光王を敬礼する、そういう有様が見える、そして何とも言えないいい音を出して太光王の徳を賞讃するといふのであります。

これは又不思議な事ではありますが、どうでありましようかな。土地が、宝堂や樓閣が、王に向つて身を曲げて御礼をするといふのは、太光王がその土地の恩を感じ、宝堂・樓閣の恩を感じておられる。太光王の頭がその三昧の中に於いて下つてゐる。そうすると一切はこちらの方も、土地も宝堂も樓閣も心があればその太光王の心に答えて御礼をするといふ事になるといふような心持でありましようか。そして妙音を出して王の徳を賞讃する、といふのであります。王の方で土地や樓閣の自分を守つて下される徳を賞讃する心持がある、それが響いてゐるといふような事でありましようか。それから今度は、その都の内外に住んでゐる人民達が来て、自分の体を地に投げて太光王におじぎをする。頂礼、太光王を頂くように御礼をするのであります。それから、そればかりでなく天の雲も諸々の鬼、そういうものも皆慈悲の心を起して色々な悪をつくらず、この太光

善知識を思つて行く

それから善財童子は太光王に別れてそちらの方に向うのであります。その途中善知識といふ事について非常に感激を致します。感激はますます深くなりまして、遂に涙を流すといふようなところまでなりながら、善知識を憶うて歩いて行くのであります。善知識に遇うといふ事はなかなか六つかしい事であり、善知識の教を聞くといふ事はなかなか六つかしい事である。善知識は自分にとつては宝の山のようなものであるといふ事を考え、又口にも言い、こういう風にして善知識を憶いながら進んでまいりますのであります。その時に虚空の中に於いて声が聞える、空から声が聞えて来る。善知識の教に随うと諸仏世尊は悉くお喜びになる、こゝろの音が虚空から聞えうて来るといふのであります。虚空の声と言ふのは、その人の心の奥深くに響き出すところの声である。善財童子にあつてはこの時真に善知識々々と憶つて涙を流しながら行くうちに、善財童子の深い心の底から、今のような声が響き出て来る、そういう事なのであります。そんなにして善財童子は、不動優婆夷をたずねて行くのであります。

香の優婆夷

そこで安住城に行きまして不動優婆夷を探し求めます。

その不動優婆夷というのが童女というのでありますから、まだ少女であります。十三・四才というところでありましょう。そしてその父親母親の傍についておりまして自分の家の中にいますのであります。善財童子がその不動優婆夷の住居にはいますと金色の光明が善財童子の身に触れてその場で即時に五百の妙三昧門を獲得すると言っているのでありますから、何とも言えない心の落ち着きを得るのであります。そして身心柔軟となる。これは御経によく出て来る言葉であります。これはまあ非常にいい言葉であります。身も心もやわらかくなる。そして又妙香を聞くといふから、心も何とも言えないいい香であります。このかおりといふところは、何時も申しますように御経に出てまいりますところのかおりと言ふものは、心を静めるかおりなのであります。そして今の不動優婆夷を見ますと煩惱が消滅する。そしてその優婆夷は体の毛穴から始終何とも言えないいいかおりを出しているといふのであります。

香と言ふのは前にも出て来たようであります。善財童子の心を落ち着ける、善財は一体煩惱を燃してはいない筈であります。とにかくこの童女を見ると言ふと煩惱が消滅する。これはそんなものであります。俗な解釈を致しますようでありますけれども、このごろある人が恋愛という事について書いておられるのを読んで見たのであり

ますが、恋愛というものが性欲でない、純粹であればある程性欲というものは姿を消して行くことを書いておられるのを、ついこのごろ読んだのであります。成る程そういう事は私だつて多少の経験がある。私自身は本當の恋愛をした事が無いというのが正直な話でありますけれど、併しそういう事はわかるのであります。やつぱり純粹無垢な少女に対しては、自然と自分の心の煩惱なんかは何処かへ消えたように感ずる。そういう事は私などの俗的な経験でもあるのでありますから、この不動優婆夷を見れば煩惱が消滅するといふようなお経の文句も多少はわかるように思えます。

星の空と仏様

それで善財童子は讚嘆の偈文を説くのであります。即ちこの不動優婆夷を譽め讃える歌をうたうのであります。そうするとこの優婆夷の方では自分の得ているところの様々の悟りの法門を述べます。で善財童子はそれについてなおたずねてあります。するとその優婆夷が過去の因縁を物語りますのであります。それで過去、遙かな遠い昔と言つてもその昔といふものが光り輝いている昔、無垢光劫とありますからこれはなかなか面白い処であります。私なんか今迄七十年の過去をふり返つて見ますと無垢光劫ではあり

大自然の感じ

ませんで、どうも色々の煩惱の歴史というようなものになつて穢けがれの無い光の時間を過したというような事は微塵もありません。それでその優婆夷が過去を振り返つて見ると、光り輝いていますが、その昔に仏様があられ、修しゆ習じゆといふ名の仏様でありました。その時に國王があり電でんじゆ授といふ名であります。一人の女の子がいました。それが私であります。その夜おそくなつて母親もきようたいも皆眠つていた時に私は高殿の上に乗つて、仰いで空の星を見ました。そうすると虚空の中に於いてあの如来が見えました。その仏様の化身があつて普あまねく大光明を放たれて、光明が網のようになつていました。その仏様の相好すがたを見ると飽くといふ事がない。何時迄見ても又仰いで見たい、こういう仏様であつて、その仏の体の毛穴から皆何とも言えないかおりを出しておられた。私はそのかおりを聞きますと体がやわらかになつて、心が何とも言えない喜ばしい心になりました。その如来は私に様々の方面から悟を開けと述べられた。この時から私は仏の境地というものを志すといふ心を起しまして、その初發心以来非常に長い時を重ねております。このようにして仏の境地に入るようになりました。つまり菩薩の三昧門、願行門といふのに入りました。こういう事を今の不動優婆夷という少女が善財童子に向つて過去の因縁として物語るのであります。

この中で私を感じました事は、高殿の上から上の方の空を仰いで星を見る、そうするとそこに如来の御姿が虚空の中に見える。このところに何か深い意味があるように思えます。やつぱり星の空といふものは、私共仰いで見ましたも何とも言えない美しさを感ずるのであります。まあこのごろの進んだ科学から言えば又ちつと違つた事になるかも知れませんが、私共が自分の目で空を眺めると、星の空といふものは本當に美しいものであります。満州に行つておりました時なんか満州の夜の空の星といふものが非常に美しく見えました。私が青年時代にアメリカのエマソンという方の論文を読みました。その中にこんな事を言つております。「星といふものが千年に一度位しか見えな

喜を生ずとなつて居ると。ここまで行けばいいと思うのであります。

ただ自然科学的な説明になりますと、存外殺風景なものになりまして、人間が、科学者などがひどく偉い者になつて、今は宇宙旅行をやつて月の世界や火星旅行までやつて月を征服したとか火星を征服したとかと言うようになるかも知れません。今だつてヒマラヤ山の頂上を征服したとかあれは西洋人の言つて居る事で日本人もその真似をして、征服した／＼と言ふ事を言つておられますが、征服したといふ風に感じますのは浅薄な感じだろうと思うのであります。そんな感じ、そういう心を以て山に行つたりするからこのごろ遭難事件が始終おこるのであります、昔のお山の行者ぎやうのような心持で登山をすれば、今のように遭難は起らんと思ふのであります、大体東洋の思想は殊にそうでありますが、大自然の姿を見てその姿から尊い感じを受けて、その前に頭が下るといふ風の敬虔けいけんな感じを大自然に対して持

法 信 抄

山口県 末 永 利 夫

………今朝慈光誌をいただき、開巻第一、池山先生の「ただ

もはずんで申され、心ひそかに「我絶対の信を得たり」と喜んで居りました。ところが秋頃家庭問題が縁となりまして、今までの喜びも感激もどこへやら、お念仏も味気なくなつてしまいました。妄心に向つて信心を問うてはならぬこと、自分にも言いきかせ、人にも語つて居りながら、何時の間にか妄心に向つて信心を問う愚かさを繰り返して居るのであります。

今日まで、罪悪深重、煩惱具足の我が身、無常迅速の人生、ただ念仏に生きるより外ない私であると思ひながら、何も取りえないが、唯一途に信仰の道にはと思つていたことが、ガラリと崩れて、宗教的にも無価値の私であることをまぎ／＼と感じました。そらごとたわごとまことあることのない我が人生に、唯一つの信仰に生きることでだけがあると、それ一つだけを頼りとしていたのに、その信仰にも到底おぼつかないことがわかりますと、全く生きるよりどころを失つてしまつた捨小舟のように感じました。

ところが不思議なことに、真黒にすすめた私の心に、ただひとつ、お念仏だけがハツキリと輝いて居るではありませんか。私は「あらつ！」と驚きました。

その時、そらだつたか、私には信心なんてあるのでなく、御信心はお念仏にあつた。私は常に若存若亡する奴であるが御念仏だけが不退転であつた。私は今まで、ただ念仏と言ひながら、その奥に、お念仏を通して何かお慈悲というもの、御本願というもののまごころというもの、お浄土というものを身をもつて感じたらねばと思つて居りました。ところが、お慈悲も、御本願も、お

つ、そういうところが不動優婆夷の過去の体験として物語られて居るのではありますまいか。そう致しますとこれが私共に非常な導きになるのじやありませんまいかと言ふ事を考えさせられるのであります。

三 昧 の 模 様

そう言ふ事を今の不動優婆夷は申し述べて、それからやっぱり三昧門にはいつた。三昧門にはいりますと十方微塵みじん数の世界、沢山の世界が又六種に震動する。そしてその中に如来の修行の様々の場面があらわれてくる、色々の仏様が色々の修行をしておられる、それが不動優婆夷の三昧の中にあらわれてみえる。

そこで不動優婆夷としてはこう言ふ法門を自分は何行つておりますばかりであります。これ以上の事はわかりませんと、こう言ふ風に申すのであります。

念仏」の御文を読まして頂いて、何だか心躍るものを覚えおたやり申します。

ここ二・三年、私の辿りました道は、自分の妄心に向つて信心を問う愚かさを繰り返した私でありました。今年の夏頃、ある機縁に恵まれて、一段とお慈悲が身にしみて感じられ、お念仏

浄土も、一切がお念仏にこもつて居ることに気付かして頂きました。

私の心は常に迷いに迷ひ狂いに狂ひ、全くあてになるものは何一つない、すべてお念仏にあるのであります。

……お念仏こそ仏のやるせない悲涙の結晶である。そのお念仏を外にして何処に仏の御本願があるう。お念仏こそ御本願そのものであると気付かせて頂いて見れば、今までの一切のもじや／＼した観念の遊戯から解放されて、ただ念仏だけが残つて下さいました。……

最近折にふれ、心に浮ぶまを歌になぞらえました。

くる／＼と廻り通しの風車ただ念仏のしんにもたれて

思うこと感ずることもあてならぬただ念仏の貫きてあり

ゆきづまりまたゆきづまりしてとまどえるわが行くさきに

念仏かがやく

雲間もるさやけき月に照らされて伏屋そのまま美しき哉

むくむくとおこる心の醜さをそつといたわる念仏の声

大遠忌遺徳しのびつ集い寄る津々浦々の念仏の友

南無仏と凡愚の道を示されし遺徳しのびつみ跡辿らん

一人居てみこと仰げば二人とぞのせらせたまひしみ親なつかし

とりどりの生業もちて睦み合ふ浮世も六字の中なればこそ

喜びも憂き悲しみもそのままにただ念仏に今日も暮れ行く

あとがき

四月の東本願寺の御遠忌中には高倉会館で、信国淳氏、西元宗助氏、川畑愛義氏、東昇氏が、日を連ねて講筵に臨まれた由。

卅年も前には、同じ会館で池山先生の御講話を肩をならべ膝を交じえて拝聴した遠く深い御縁の方々とて言いようのない嬉しい報せでありました。然しその中でも川畑さんは三月十九日に御令弟を亡くされたばかりの身とて、中外紙上に発表された講話も涙をもつて読ませて頂きました。

それにつけても、ことに昨年初め頃から、私共の知友の上に、不慮の出来事が多く、いかにも難度悔であることよと知らされるにつけ、秀存語録の「北越の貞信尼云く。山越にあるべき甚

兵衛という人あり、如何なる事起るも、この人常にあるべき事といえ、人々かく名付けたるなり」
とある一節を思い浮べ、甚兵衛さんを入なつかしく思いました。

五月中旬、滋賀県の志賀町北小松森西洲師来庵。御遠忌の報恩の記念とされて「のべがき、教行信証」を著され、一部御持参下さいました。長い御勞作でありましたことよと感佩申しつつ拝読させて頂いて居ります。

白井成允先生講話会

- ☆ 七月二日 午前九時半、 栄町、愛知県文化会館。主催、信道会館。
- ☆ 全日 午後一時半、 南区駈上町、一道会館。 主催、慈光社、

筆者の御住所

東京都世田谷区上北沢三丁目一三二 福島政雄
新潟市関野堀割三丁目十一 佐藤強三郎
山口県吉敷郡大内町仁保 松村繁雄

御案内

毎月 第一、二、三日曜、午後一時半、
一 道 会。
毎月 廿四日、午前 午後、
昭和区小椋町教西寺、法話会。

定 価 一 部 二 十 五 円 (送 共)
半 年 百 五 十 円 (送 共)
一 年 三 百 円 (送 共)
名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田正夫
名古屋市中種区千種町馬走二八
印刷 人 本 田 政 雄
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行 所 慈 光 社
振替口座名古屋一〇四七〇番